

編集後記

斯波 義信

(一)

今回の第53号では、図書部課長で漢籍の書誌学を専門とする會谷佳光研究員の寄稿により、かねて待望していた東洋文庫の蔵書中の善本の書誌情報を掲載できたことは、まことに喜ばしい次第である。図書館として蔵書を利用する内外の研究者に対して提供すべき責務は、なканずく分類整理された蔵書目録の作製と、できうれば、少なくとも善本各件についての書誌記述、傳世、傳來の來歴、僚本、異本と比べた知識、などの情報の提供であろう。蔵書の目録化については、一九四八年から二〇〇九年の長期にわたって、国立国会図書館から絶大な支援が得られ、この間に各種の蔵書を目録化する作業は著しく進捗し、一九九四年にはじまった図書館業務の電算化、情報のデジタル化という新しい体制に対処することができた。

さて書誌情報の提供については、創立以来、重要な個人蔵書などの寄贈を受けた機会に、その目録と合わせて概要を紹介する冊子を公刊する習わしが続けられてきた。一九七四年は創立五十周年に当たり、この時、研究員、図書館職員の協力の下で白木屋を会場として大規模な蔵書の展示が行われ、展示品の解説が『東洋文庫五十周年展』（一九五一年）として作製され、出品各点の概要の解説と書誌が付された。次いで一九八四年の六十周年を期して、榎一雄『東

洋文庫の60年』(一九七七年)及びDr. G. E. Morrison and the Toyo Bunko (一九六七年)が刊行され、蔵書中の主要なコレクションを紹介する書誌が公にされ、ついで文庫内の東方学研究日本委員会(現研究部日本研究班)の手で『岩崎文庫貴重書書誌解題』巻I(一九九〇年)が刊行され、すでに巻Xを出版済みであって、全作業が完結する日も遠くはない。會谷氏の労作はこの『岩崎文庫解題』を参照するほか、他の寄贈書についても検討して、三十三点を三十三の書誌項目に区分するもので、将来東洋文庫蔵書中の善本解説を試みるための基礎作業をなすものであって、続稿が大いに期待される。

中善寺慎氏の「東洋文庫蔵本に押捺された蔵書印について(十九)―公家・華族の蔵書印―」は、本誌に連載されてきた研究の続編で、文庫蔵本の「蔵書印」を、系統的、分析的に整理している。各点ごとに詳しい原蔵、傳世の考証が付され、各書籍をめぐる文化の流れを解くものであり、書誌情報のデータとしては貴重な貢献である。

高木雅弘氏「三國史記」「地理志」の高句麗地名漢字―主に日本語との比較による考証―は、平安期に訓読法が興る以前の古代日本語の形成期に、高句麗や周辺北方國との交渉の中で、固有名詞とその読み方が日本語に影響したことを研究した力作の続編である。法制史の草分けであり、有職故実を家職とする家の末裔だった宮崎道三郎博士の労作にも、日本法制語彙のルーツを、古代日本の朝鮮半島との文化交流に求めた論考があった事を思い出す(中田薫編『宮崎先生法制史論集』岩波書店、一九二九年)。

徐小潔女史の「『永楽大典』紙質の初歩的分析―非破壊調査の試み―」は、高精細デジタルマイクロスコープを用いて、書籍を傷めることなく、用紙原料の仕様をつきとめ、データを蓄積して書誌を初め各種の分析の一助とする試み

の導入についての紹介であり、愛書家、蔵書家の興味を引く話題である。紙の製法や流通についての記録は、探せば案外かなり存在するので、将来性のある研究と思われるが、作業がある程度進んだ段階で、観察結果に何らかの規則性があるのか否か、それが観察データの性質や特殊性とどう関係するのか、を調べて仮説を提示していただければ、この作業のふくらみが増してくるだろうと考える。